

# 風土を温める あたた

シリーズ 高山の文化財 ⑧  
 【真指定文化財】 鰐口

鰐口とは、仏堂や社殿前の軒下につるし、太い綱で参詣者が打ち鳴らすための鳴器です。中は空洞で、側面の下方に細長い開口部があり、それが鰐の口のように見えることからこの名がついたといわれています。

承応二（一六五三）年、金森家四代頼直が創建した大隆寺（春日町）には、鎌倉時代の正応二（一二八九）年の年号がある古い鰐口が伝えられています。

鰐口とともに、それをめ込むように作られた木製の奉納額（下写真）もあり、この鰐口が大隆寺に納められた由来が、儒学者の赤田元義（臥牛）の撰文により記されています。

それによると、この鰐口は文化元（一八〇四）年の春、阿多野郷甲村（現在の朝日村甲）に住む長八という農民が土の中から掘り出し、それを高山町などの有志十七人が買い入れ、同年冬に額に納めて大隆寺に寄進したということです。寄進者の筆頭には、野口養安の名があります。野口家は代々養安と称した陣屋御出入の医師で、俳諧にもすぐれており、



大隆寺墓地には三声塚といわれる野口家三代（午有、兎来、弄化）の句碑もあります。額にある養安とは、三代の野口弄化のことと考えられています。また、伊東清三郎や二木長右衛門、永田吉右衛門など、当時の高山の有力な商人の名を見ることがもできます。

鰐口が寄進された文化年間、大隆寺の三世竺翁恵林和尚は国内を托鉢して回り、本堂、妙見堂の修理や、弁天堂（市指定文化財）の創建などを行っています。また、赤田臥牛や館柳湾といった文化人とも交流があり、この寄進の経緯から

学者文人との交流を知ることができます。鰐口は銅製で保存状態も良く、二重圏線で三区に分けられ、外側の銘帯に次の銘文が刻まれています。

「敬白 奉施入 金一口 岩口寺御宝前 右志者偏為心中所願成就円満故也 正

応二年十二月十八日 願主沙弥道阿」  
 額には、銘文の十文字目（口印）が読めないとい記されていますが、これは「殿」の字で、長野県東筑摩郡坂北村にある岩殿寺を示しているとの説もあります。

県内では、郡上八幡の那比新宮神社にある文永五（一二六八）年の銘の鰐口が最も古いとされています。大隆寺の鰐口は、これに続く古いもので、昭和四十六年に県の文化財に指定されました。

〈所有者〉 大隆寺（春日町）

〈管理者〉 市郷土館（上一之町）

〈時代〉 正応二（一二八九）年

※木額は文化元（一八〇四）年

〈寸法〉 直径 十七・三センチ、木額 縦五

六・五センチ 横二二・一センチ

〈見学〉 市郷土館の特別展コーナーで展

示中（市民無料）

期間 十二月十四日まで（二日

と八日は休館）

時間 午前九時〜午後四時三十

分



由来が記された額に納められている鰐口